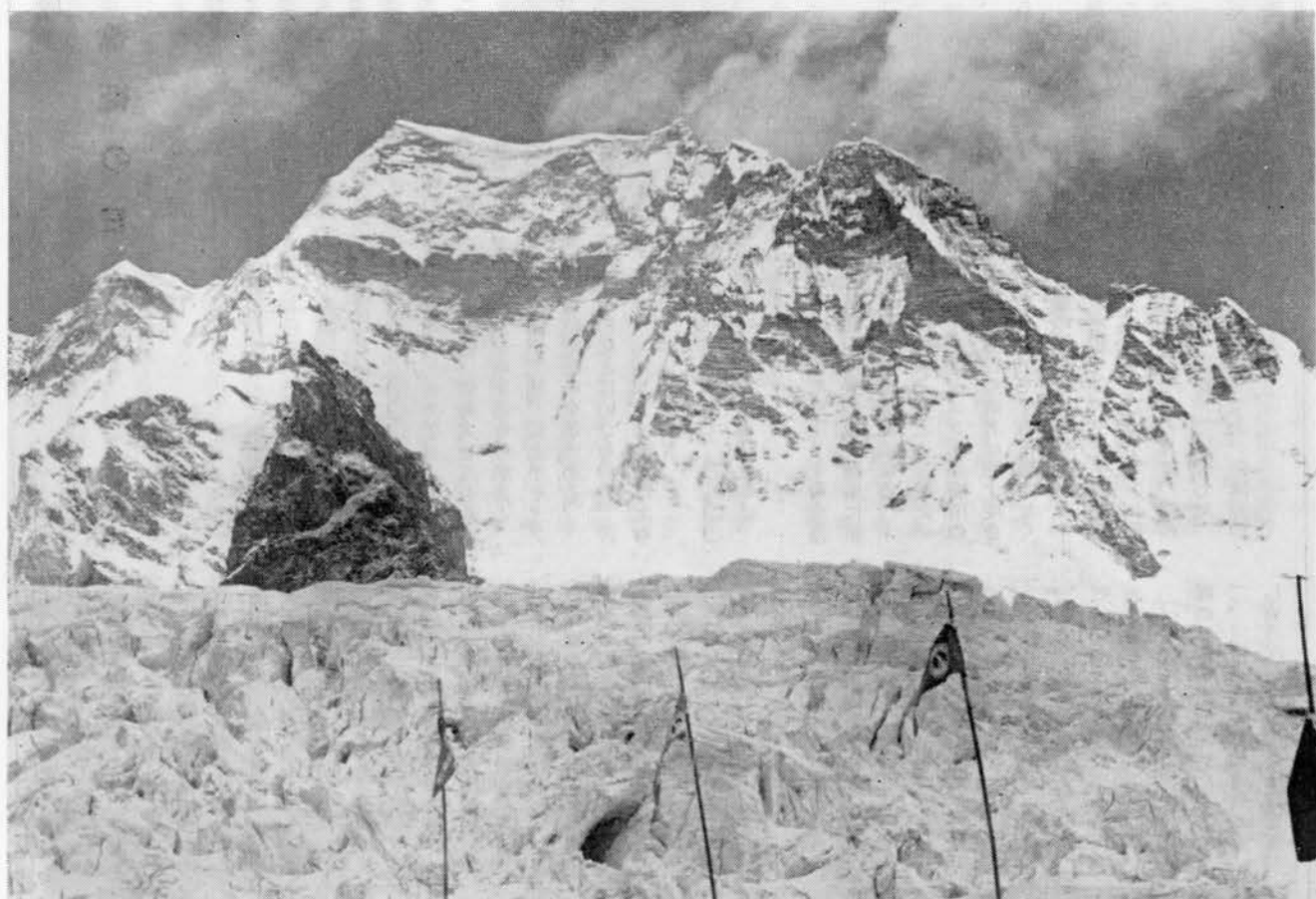


山と博物館

第9巻 第6号 1964年6月25日 大町山岳博物館



カモシカ異変

今年春先、早々から今までカモシカの死体が五個体もみつかった。

四月十三日 市内平区野口の高瀬川大和田地籍で雌一頭、五月四日 市内平区高瀬川不動の滝で雌一頭、五月十一日 市内平区高瀬入北葛沢地籍で雌一頭、六月一日 市内平区高瀬入笹平地籍で雌一頭、六月二十三日 市内平区高瀬川笹平地籍で雄一頭、矢つき早のカモシカ騒ぎで一同目を白黒。

ことに発見された地域が、高瀬川へそそぎ込む支流と本流だけであるというのも不思議である。調査すればおもしろい結果が得られるかも知れない。

しかし、何をするにしても先たつものは、金である。ク金クのことをいえば、これらのカモシカの保存である。剥製に骨格標本にと依頼はしてみたものの、まさか五頭も続けて見つかるとは思ってもよらない。標本製作代掘出に頭をかかえこみその上内臓標本の瓶すら満足に買えない仕末。調査どころか保存することだけでも頭が痛い。

カモシカのみつかるのは死体ばかりかと思っていたら、生後間もない幼獣が、栃木県の足尾市で雄一頭が保護され、又、長野県の須坂市でも一頭が保護されたという。

これらのカモシカがすくすくと育つてくれることを祈って止まないが、それにしても、今年のカモシカがよくみつかるとある。

(千葉彬司)

長野県山岳連盟隊

ヒマラヤ遠征の日々

武田 武

ヒマラヤ登山の基地となるネパールの首都カトマンズへ、今年入った登山隊では全日本ヒマラヤ登山隊の我々の隊が一番先であったそんなことが幸いして、サーダーのパサンプタール■をはじめ、過去に優秀な成績を残しているシェルパを集めることができた。このことは登頂成功の大きな力となった。

しかしこれと反対に、時期が早かったために思わぬ障害もあった。

インド・ネパール両国ともたいしたトラブルもなく全部の装備、食糧等の荷物の税関も済み、三〇〇余人のクリーリ集めも、その他登山開始までの全ての業務は非常にスムーズに運ばれいよいよ、キャラバンを開始した。

キャラバンを開始して間もなく遠征隊があった障害はインフルエンザであった。一部の隊員を除いてほとんどのものが、原地のインフルエンザにおかされ、苦しい毎日のキャラバンを続けなければならなかった。

三〇〇余人のクリーリを休ませると、その賃金だけでも莫大なものになるので、休養日もないまことにづらいキャラバンが続く。

このネパールのインフルエンザで、生れて一年未満の幼児の80%が死んでしまうのとこのであった。

三〇〇余人のキャラバンは先頭と最後では二キロ以上の行列になり、いたるところから苦しげなセキが聞こえ、さながらセキの行進といった感があった。

キャラバンの一日行程は十二〜十五キロ位で二〇〇〜四〇〇メートルの峠を登り降

りする毎日である。

周囲の植物、樹相のほとんどがまだ褐色のねむりからさめておらず、それに加えて異状乾燥で道は灰の中を歩いているよう、カメラはケースの中までほこりが侵入し、口の中は砂でジャリジャリ。途中二〇〇メートル付近に咲いていた真紅のジャクナゲは、ちょうど日本のツバキと同じ色、幹も大きなものになると直径が一メートルもあるものがある。

他にサクラソウの仲間が二種、以上がキャラバン行程中開花していた花の全部である。しかしこの二、三種の花とはいうものの、苦しいキャラバン中すいぶんなくさめられたものだ。

隊員の半数がバテバテになって、三八〇〇メートルのナムチエバザールへ着いたのは、三月四日だった。

ここでカトマンズから来たクリーリを全部解雇し、隊員は二日間の休養の後、高所に耐えられるクリーリと交替して基地になるベイスキャンピングへ向けて出発することになった。

休養日が過ぎてインフルエンザに高所の影響が加わり、町田、北村の両名は四十度を越える高熱でキャラバンができる状態ではなくここに居残り、最悪の場合はナムチエバザールにあるネパール政府のチェックポストがあり、無電でヘリコプターを呼びカトマンズ病院へ入院させる手はずまでとのえて、他の隊員はベイスキャンピングへ向かって出発した。

この時の隊長でありドクターであった隊長の心中は察するにあまりある。

ベイスキャンピングに向う隊員も重い怪いの差こそあれ、インフルエンザにかかっている。結局隊長は本隊々員の健康管理と合せてキャラバンに加わるようになった。そして長いキャラバンも終り明日はベイスキャンピングだといふところで吉沢、武田がインフルエンザに高山病で四十度を越える高熱で倒れてしまいベイスキャンピングへはほとんどほうようにしてたどりついた。

ベイスキャンピングはゴジュンバ氷河のモレーヌ(五三〇〇メートル)へ三月十日に建設した。クリーリは全員荷物を置いて帰り、あとの荷物輸送、前進キャンピングの建設は、隊員

シェルパによって行なわれなければならない。ベイスキャンピングの地点から上は、植物、動物の類は全くなく岩と氷のみの世界である。

このソロクムンブ地区は、五〇〇〇メートル付近が植物の限界であって、それ以上はコケすらも生えていない。

従って動物も住めない。ただしゴウラという鳥に似た鳥は我々遠征隊の後をついて、七五〇〇メートル位まで登って行った。

これも私達の残飯などが目当てで、私達が帰ると又元の五〇〇〇メートル以下へ舞いおりてきてしまう。

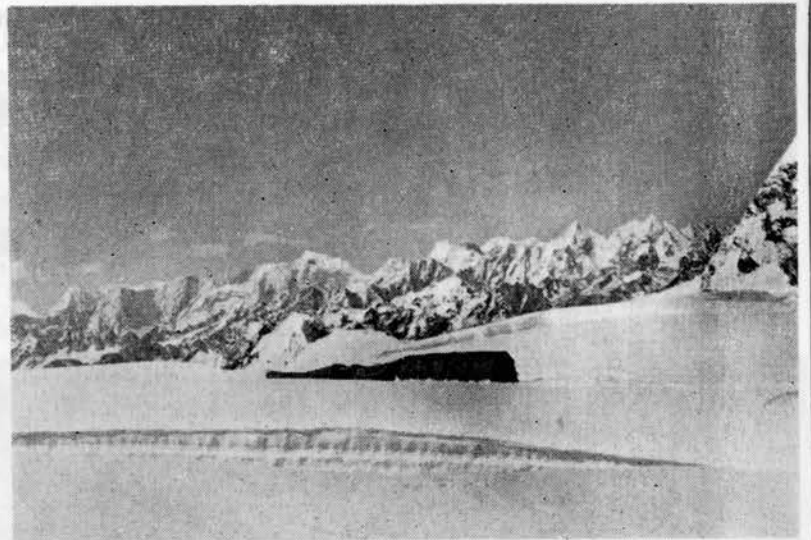
ベイスキャンピングで装備、食糧の整備や点検をしたりして二、三日の休養で、高熱に苦しめられた隊員達も全員元氣

をとりもどして、ルート工作に荷物輸送に加わることができるようになった。ベイスキャンピングからはゴジュンバ氷河の最も困難な、そして巨大なセラック地帯が段になって連なり、その最奥部にギヤチュンカンの主峯が、何ものをも寄せつけないといった姿で立ちはだかっている。

前進第一キャンピング建設までは垂直に切り立ったビルディングのようなセラック帯と、その間に横たわる魔のクレバスにさえぎられ、撃退され、四日目によく第一キャンピングを

① 登攀中に憩う隊員





③ 第3 キャンプ

第一段目の懸垂氷河の上へ建設したが、この時の焦燥感をヒマラヤ三回目の加藤隊員は後に成功後カトマンズへ帰り着いてからの反省会の席上、今遠征を通じ最もつらかったのはベースキャンプから第一キャンプへのルート偵察であったともらしたくらいであった。

第一キャンプから第二キャンプの間にも、同様懸垂氷河があり、キャンプからキャンプまでの間は全部固定ザイルを張るといような所であったが、順調にルート工作も進み、それにつれて荷物の輸送も順調になり、第二・第三キャンプを建設することができた。

第三キャンプまでくると高度のため、改めて頭痛をうったえる。

夜の睡眠が満足にできなかったりあまり順調に早く前進しすぎるためか高度に順応するのに忙しい陽やけどめクリームなども使用したが強烈な紫外線に顔ははれ上り、口は割れて三ツ口のようになったりで、隊員の形相は変わったものすこくみえる。呼吸が苦しいので鼻と口を大きくあいて息をするので、口の中まで雪の反射でやけあつい紅茶、塩味のあるもの、味噌汁をすうにも痛みをうったえるようになってきた。

第四キャンプはクロアール下部(六六五〇メートル)の広い雪原のようなところへ建設された。このテントが前進根拠地になった。この頃からナムチェバザールに残り病氣療養をしていた町田、北村隊員も回復して戦列に加わった。

その他の隊員も全員快調で休みなくクロアール工作に力をそそぎ、疲れればすぐ後に控えた組と交替して進み、まったく快進撃が続いた。それに天候もベースキャンプ以来好天続きであらゆるものが我々に幸いしているかのようだ。

第五キャンプをクロアールの中途の傾斜面の一部の水を切り崩してテントを張る部分だけをわずかに平にして建設した(七〇五〇メートル)。

その夜、前々からひそかに恐れていた雪崩がこのテントが見舞われた。このテントにいた加藤隊員、他の者は一瞬やられたと自分の運命を考えたそうだ。

すさまじい音と、落下する水とナイロントの摩擦で起きた静電気は雷を伴った稲妻のようだったと語った。

ポールを折られその夜半、命からがら固定ザイルをたよりに第四キャンプまで避難した翌日改めて雪崩をさけるようにして、第五キャンプが建設された。今度はその日シエルパの扱いが悪くてガスターボンベが爆発してテントが燃えシエルパが火傷する事故が起きた。ここまですると、簡単な字が思いだせなかつたり、物忘れをするようになる。ひらがなのククやクゆの字がどうしても思い出せなくなり字を書くということが苦痛に感じられる。

ルート工作は第三キャンプからは、下に比べて楽になってきたものの、そのかわり酸素不足と高度に苦しめられ、歩行も牛の歩くより遅く、しかも三、四歩行くと大きく深呼吸をしなければならぬ。固定ザイルを張る作業も大変だ。四〇〇〇メートル以上の所に年間通じて常住しているシエルパでさえも第五キャンプ以上の高度では我々とまったく同じ

④ 第2 キャンプと本館の旗



である。頂上まで固定ザイルを張ったところがほとんどで三五〇〇メートル用意したザイルはほとんど使いはたし張らないところの方がわずかであった。これは世界ヒマラヤ登山史上でも初めてのことである。

(山博協議会委員、大町山の会)

前号では四か条騒動のアウトラインを世上に流布されている諸説をまとめて記したが、本号ではこの騒動がなぜ起ったのかを探ってみようと思う。

まず、大町市松崎の高橋氏所蔵に「赤藟談」なる記録があり、この中から騒動の原因になったと思しき箇所を摘出してみよう。

「今年文政八乙酉夏より秋に至り、風雨時連日寒暑節を失い氣候正しからず。洪暴暴風の為に桑麻長せず。作毛更りあしく、中んづく米穀熟さず稗のみにして、農家半税を納む。市店に売買するところ金巻両を以て、米八斗より七斗五升の値に高騰し、寒郷の窮者は餓死に困りて村々年貢をゆるめ猶扶助の救いを得ることを願ひ、領主よりも施恵の令ありて困窮の患なからしめ、封内飢渴の苦をまぬがれ寝食を安んずるに至る。然るにいかなる時や至りけむ。

賊乱僻地の孤村より起り、南北三十里安曇郡一円麻のごとくに乱れ、昼夜を分たす前後五百百姓騒動起りける。」と記している。これによると文政八年は、氣候の不順から米穀をはじめ四か条名産ともいえる麻まで大層の凶作であったようであり、そのため物価は上昇して百姓は生活の扶助を松本藩に願ひ出ていることが知られる。凶作の実態がどの程度のものであったかは詳らかでないが、この記録以外にも当年は凶作であったとする史料があるところからすれば、平年作までいかない凶作であったことは首肯され得る。もともと四か条は松本藩の中でもとりわけ渥田が多く、地味は悪く、降雪も早くしかも稀有の豪雪地帯であるなどのところから、氣候不順は直ちに田畑の作柄に影響するところである。江戸時代

四か条騒動 (2)

巾 具 義

中頃の四か条村々からの藩宛願書の中に、この村々をよぎる平川・松川の上流で藩の許しを得て近年硫黄を採掘するものがあるが、このために山の神のいかりにふれて河川は氾濫し、作物にも害が及ぶから硫黄採掘を止めさせてほしいなどと述べているが、これを迷信の一事と一笑し得ないほどに四か条の農業は乏しい生産力ではなかったようだ。長冬多雪のため開墾期には杜氏(とじ)・行商・出奉公など出稼ぎも多く、そうしなければ四か条農民の経済は成り立たなかったのである。

さらにこのようなところへ、騒動の直接的な原因として赤藟談はつぎのごとく述べている。「そもそもその由来をたずぬるに、大町より北四か条といえる村々、今年凶飢にして米値貴く、そのあたり市店といえるものあらざれば、貧賤なる者わずかの米も求むることを得ず。飯森村藤左衛門藤四郎なる者は富裕にして倭数多く積み持ちてありけるが、貧者ともへ少しく売らんも煩わしければ、近隣より乞い来れども与えず。塩島新田(四か条の中)半蔵なる者酒造しけるにより、藤左衛門藤四郎等の持米多く買い取り、今年の酒造を始めけり。是れ等の事よりいささか趣を含み怨みを萌して、多く酒造屋米穀貯えし家共取潰しこの騒動に及びけるにや。」と、その原因を藤左衛門藤四郎等の米穀買い占めによる百姓の困窮にあるとしている。

次号へつづく (松川小教諭)



ヒンズイ

長 沢 修 介

6月も中旬を過ぎると里の鳥のほとんどはヒナの季節となってしまうが、標高千五百m付近では、まさに春たけなわで沢山の鳥が我が春を高らかに歌っている。

ビンズイもそんな仲間で、冬は里に下っているかないのかわからないような地味な生活をしているのに、今は大きな木の梢などに止って、大声で美しい囀りを聞かせてくれる。また、上空から翼と尾を一つはいに広げて、ビイチチ、ビイチチ、プイプイと鳴きながら下降する様はヒバリと良く似ており、別名のキヒバリという名前の由来ももっともだとうなづける。

博物館 ニューズ

単行本「雷鳥の生活」発行

発行所、第一法規出版株式会社で進めていた単行本「雷鳥の生活」はできるだけよいものをつくらうということで発行の時期もおくれ勝となっていたが、こんどこの本の内容見本もできあがり、早速関係方面へ配付して、購買方をお願いすることにした。

単行本はB5判、豪華特製本で本文一八〇頁、原色写真五点、単色写真一九点、図版二五点を使用して、定価一八〇〇円、(送料実費)発行は七月上旬の予定だが、本館で予約注文受付中なので、希望の向はお申出いだきたい。

花壇を寄附

大町のまちを美しくしようと会と市内黒岩ブロックから、それぞれ五〇〇〇円相当のプロック製花壇を寄付していただいた。この二つの花壇に沁もう花も植付けられたが、夏から秋にかけて山博の前庭も色とりどりの花で飾られよう。

表紙説明

第1キャンブよりのキャンチュン・カン
撮影 武田 武

山と博物館 第九巻 第六号

発行所 長野県大町市TEL(大町)二二二
大町山岳博物館

印刷所 大町市上仲町
信州印刷大町工場

